

猿 橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

「こんにちは」の効用

校長 澁谷 一 男

長期予報どおりの少雪。降るべき時に降らないことで様々な影響も懸念されるが、日々の生活にはありがたい。

それでも、朝の空気は肌を刺すように冷たい。児童玄関を解錠した瞬間、子どもたちの行列とともに、凍っていた空気も一斉に動き出す。「おはよう。寒さに負けず、今日もよく来たね。」そんな思いで子どもたちを迎える。



最近、子どもたちの挨拶がよい。昨年度赴任してきたばかりの頃は、お世辞にも挨拶がよいとは言えなかった。毎朝、児童玄関前に立っている私の横を黙って通り過ぎる子も少なくなかった。こちらが声を掛けているにも関わらずである。自分が声を掛けられているという自覚のない子もいるようだったので、子どもに向かって手を振って挨拶することにした。「あなたに言っているのですよ」という私からのメッセージだ。この頃は、黙って通り過ぎる子はほとんどいない。私に向かって手を振りながら挨拶を返してくれる子も多い。会釈をしながらというのが本来の姿だが、ここはご愛嬌とご容赦願いたい。

毎月の生活目標でも、挨拶についてのみ、年に 3 回（4 月・9 月・1 月）取り組んでいる。挨拶当番や「挨拶の木」など、手を替え品を替え、学年毎に工夫した取組を継続してきた。

全校朝会でも挨拶に関する講話を複数回行った。その都度、その意義や大切さを伝えてきた。もちろん、それらを教えるのは大切なことだが、一方で、挨拶は理屈ではないということを伝えることも必要だ。挨拶はするのが当たり前であり、いちいち考えてするものではない。いわば癖のように、反射的にできるようになってこそ、本当に身に付いたと言えよう。

そこで仕掛けたのが、「こんにちは」の日常化である。廊下などで子どもたちとすれ違うたびに、「こんにちは。」と声を掛ける。子どもたちは、初めのうちこそ怪訝な顔をしていたが、今ではすっかり定着したようだ。来校者に対して、自然に挨拶できる子も増えてきた。「こんにちは」の効用は思いのほか大きかったのである。

子どもは、大人の姿を映す鏡だ。子どもを変えるには、まず大人が範を示すこと。今日も子どもたちとさわやかに挨拶を交わし、1 日が始まる。